

第六回

琉球・中国交渉史に
関するシンポジウム

論文集



生田 滋氏



吳 元豐氏



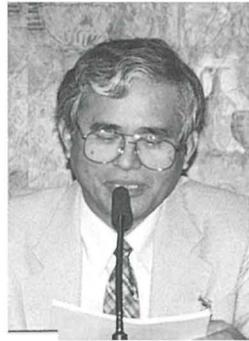
楊 永占氏



鄒 愛蓮氏



上里 賢一氏



安里 嗣淳氏



胡 忠良氏



李 国荣氏



朱 淑媛氏



シンポジウム



中国第一歴史檔案館にて

第六回シンポジウムの開催にあたって

沖縄県教育委員会教育長

津嘉山朝祥

「第六回琉球・中国交渉史に関するシンポジウム」の開催にあたり、沖縄県教育委員会を代表いたしましたして、ごあいさつ申しあげます。

我が沖縄県は、地理的には海を隔てて中国を臨み、歴史的には一三七二年に琉球国中山王察度が明・洪武帝の招諭を受け入れて中国に進貢してから一八七九年の廢藩置県に至るまで、およそ五百年におよぶ国家間の正式交流の歴史があります。この間、琉球は中国との冊封・進貢関係を通して、中国の政治、経済、文化の影響を受けてきたことは、周知のとおりであります。

さて、沖縄県教育委員会と中国第一歴史檔案館との交流事業は一九九一年にスタートして以来、十一年目を迎えております。昨年はこの交流事業に関わった方々が一堂に会して、沖縄県那覇市と北京、それぞれの地で交流事業十周年を記念して祝賀会を開催いたしました。本日の第六回シンポジウムもこの交流事業の一つです。

私たちは、これまでに五回のシンポジウムを開催し、これによって中琉交渉史の研究内容を豊富にしていりました。これは沖縄側の『歴代宝案』校訂本・訳注本、中国側の『清代中琉関係檔案選編』『同統編』『同三編』『同四編』『清代琉球国王表奏文書選録』の刊行とも深く関係しているといえます。同時にこのシンポジウムや刊行物

の成果は、今後、日本・中国ひいては東アジア交渉史の研究に大きく寄与するものであると期待しております。

本日は日本側から十一人が参加して、大東文化大学の生田滋教授、琉球大学の上里賢一教授と(財)沖縄県文化振興会公文書管理部史料編集室の安里嗣淳室長の三人が発表を行います。また中国側からは鄒愛蓮副館長をはじめ、呉元豊氏、楊永占女史、胡忠良氏、李国荣氏、朱淑媛女史の六名の研究発表があると伺っております。今回も琉球・中国交流史の各方面から研究発表がなされ、その成果が私たちの前にあきらかにされるだろうと確信しております。

最後になりましたが、本日、研究発表をなされる先生方、ならびにシンポジウムに参加されました皆様のみますのご活躍を祈念いたしまして、また本シンポジウムの諸準備を担当されました事務局に対しても厚くお礼を申し上げます。開催のあいさついたします。